

喪輿^{サンヨ}が橋渡しするもの

韓国の葬儀の変化の重層性

金セッピョル（総合地球環境学研究所）

近年、韓国の葬儀は急激に変化したと言及されることが多いが、それはあくまでも葬儀の物理的な側面に限られた見方である。本発表では慶尚北道地域における喪輿^{サンヨ}及び喪輿民俗保存運動を切り口として韓国の葬儀の変化の重層性を考察する。

韓国では、儒教が国教として採択された朝鮮時代から一人あるいは夫婦単位で土葬することが推奨され、朝鮮時代中期には一般化したとみられる。先祖崇拝を大きな柱とする韓国の儒教では両親からいただいた身体を毀損することは禁忌とされたためである。ただし、このような儒教的な葬儀は、還暦以上生きて、子孫（男子）がおり、村の境界内で死を遂げた死者に対して行われるものであった。それに対して夭折、事故死など「異常死」を果たした死者は火葬して散骨されるなど、「正常死」を果たした死者とは区別された。

このような葬儀のあり方は近代化を経て多少変わってきたものの、火葬に対する拒否感は相変わらず健在していた。それが 1998 年政府傘下市民団体の主導で展開された火葬推進運動と社会変化が相まって、1998 年に 27.5%であった全国火葬率が 2017 年には 84.2%まで増加するようになる。さらに、火葬後の遺骨の行方についても納骨堂、自然葬、樹木葬など様々な方法で処理されている。

このような急激な変化は、「圧縮的近代化」による当然の結果と考えられる傾向がある。しかし、それは葬儀の物理的側面、つまり遺体をいかに処理するかに焦点を当てた結果であり、葬儀の変化の重層性が看過されていると考える。この問題について、韓国の慶尚北道地域における喪輿民俗保存運動を中心に検討していきたい。

喪輿とは、主に土葬による葬儀を行う際、自宅から墓場まで棺を運ぶために使うものである。1960 年代まで一般的であった木喪輿は、最も小さい規模でも 24 人が担ぐ仕様になっていて、葬儀を支える共同体の存在が前提になっていた。かつては、村で一台～数台を共同所有し管理していたが、両班^{ヤンバン}（士族層）の場合は家に一台所有する場合もあった。また、喪輿の構造と装飾はあの世までの道程を表し、無事たどり着くことを祈る観念を反映していた。

現在、喪輿はほとんど使われていない。まず、1970 年代のセマウル運動（社会経済革新運動）での葬儀の簡素化政策により、喪輿は鉄パイプと合板でつくられ、12 人が担ぐ仕様に縮小された。また、その後の都市化と居住空間の変化、葬儀場の普及により姿を消し

ていった。

一方では、喪輿及び喪輿民俗を文化遺産として保存しようとする動きが現れている。まず、産業化による都市化が一段落したとされる 1980 年代頃から、喪輿を墓場まで担いでいく際の喪輿歌、喪輿遊び、喪輿行列が民俗芸能大会などで披露されるようになった。またその一部は地域の文化遺産として指定され、保存の対象になっている。また、2000 年以降、有力な両班の本家が多く点在する慶尚北道地域を中心に、喪輿本体及び喪輿を保管する小屋など、物質面でも保存しようとする動きが現れている。

この保存運動で継承しようとする喪輿及び喪輿民俗の意味は、共同体が一体となって、先祖を大事にする弔い方である。彼らは、生者の都合によって簡素な葬式を行い、火葬をして、先祖祭祀の期間も短縮した現在、喪輿がかつての「美しい伝統」を伝えてくれると考える。

しかしこれはあくまでも取捨選択された喪輿の意味であることは言うまでもない。喪輿を使用する葬儀を直接経験してきた老年層への聞き取り調査によると、喪輿は葬儀に使われている最中は死者をあの世に導くめ度たいものであり、それに触れる人には幸運を与える力を持っていた。それに対して葬儀以外の場面ではタブー視され、畏怖の対象であったという。また、喪輿は異常死を果たした死者は乗ることのできない、差別を含むものでもあった。このような喪輿の多様な文脈は削ぎ落とされ、共同体的・儒教的葬儀の象徴になっているのである。

注目すべきことは、共同体的・儒教的葬儀への郷愁が葬儀革新運動に共有されていることである。慶尚北道地域は儒教の伝統が強く残っているながらも、樹木葬がもっとも早く普及された場所でもある。ここでは、喪輿保存運動が樹木葬実施団体と密接に結びついて展開されており、樹木葬実施団体の活動を正当化しているよう考えられる。また、1998 年から展開された火葬推進運動においても、火葬は「儒教的精神の新しい形で継承する」ものとして位置付けられており、理念上は火葬と樹木葬・自然葬などの新しい葬儀が従来の葬儀と相反するものではないことがうかがわれる。

以上から推察されることは、韓国の葬儀は物理的には急激に変化しているように見えるものの、社会的・観念的には従来の葬儀を引き継いでいる可能性である。このような重層性を念頭において、韓国の葬儀の変化を研究していく必要がある。

キーワード 葬儀、韓国、文化遺産、喪輿、樹木葬